阿蘇と草原とわたしと

「このままでは阿蘇のアイデンティティたる草原は消えてしまう」

阿蘇の草原再生に携わる人々の共通認識です。

阿蘇草原は、手つかずの自然ではなく、人の手が入ることによって維持されている自然です。

阿蘇の美しい草原風景を守ることはすなわち、人々が草原とどのように関わっていくべきか、模索することです。

阿蘇草原は、千年以上の間、放牧や野焼きなどの人々の生業により維持されてきました。

しかし近代以降、農畜産業の衰退などのさまざまな影響で、阿蘇草原は減少し続けています。

そこで、阿蘇草原の減少に危機感を抱いた人々は、集い、協力して、草原再生に取り組むようになりました。

牧野関係者やボランティア、行政、研究者…。

〝多様な主体の協働による草原再生〟は20年以上継続しており、ひとつの大きな成果です。しかしそれでも、草原の減少をまだ食い止めきれていません。

〝多様な主体の協働〟という基本スタンスはそのままに、阿蘇草原の有するさまざまな恵みを守ることを目的のひとつに据えて、より一層多様な主体の協力を仰ぐ。新たな関わり方の構築が必要とされています。

現在の阿蘇草原のおかれた危機と、それでも草原を守っていこうという人々の想いを、少しでも多くの人に共感してもらい取組の輪を広げていきたい。

本書はそんな願いから、これまで草原再生に携わってきた人々の奮闘記と未来へ向けたメッセージをつづりました。

3 目次
4 インタビュー01 牧野組合長「草原とともに暮らす」
8 阿蘇草原の恵み
12 インタビュー02 草原再生協議会長「阿蘇草原再生のこれから」
14 インタビュー03 若手牧野組合長「草原管理を引き継ぐ」
16 インタビュー04 野焼き支援ボランティア「草原再生に貢献する」
18 インタビュー05 阿蘇市 市長「草原を守り抜く行政の責務」
19 インタビュー06 南阿蘇村 村長「“九州の水がめ”を支える阿蘇草原の価値を知ってほしい」
20 座談会 草原環境学習関係者「地域の学びとして草原を知り、ふれあう」
24 阿蘇草原への関わり方

草原とともに暮らす

インタビュー01 牧野組合長

市原 啓吉 いちはら・けいきち

阿蘇市で農業を営みながら、牧野組合長として牧野の管理を担う。草原の維持活動に従事しながら、野草堆肥を利用した農作物の販売、子どもたちを原野に招いての野焼き体験など、幅広い活動を行う。

忘れられない原風景は牛の背に揺られて見た阿蘇

「私が幼かった頃は、草原の活用が盛んでね。秋には一家総出で牧野に出かけ、そこで寝泊まりしながら牧草の収穫を行います。私も3歳のとき、両親に連れられて初めて山を登りました。のんびりと歩く牛の背に揺られて嶺を登っていく。すると、外輪山の上にたどり着いた瞬間、バーッと視界が開けて草原に金色の光が差すー。幼心に、何と美しい世界があるのかと驚いたなぁ。これが、私の阿蘇草原の原風景です」。

懐かしげに目を細めるのは、牛の放牧を生業としてきた市原啓吉さん。町古閑牧野組合の組合長を務め、長年にわたって草原の利用と保全に力を注いできた人物だ。

何万年も続いてきた営み途絶えさせないためには

「草原を放置すると、どうなると思いますか？」と市原さん。人間が草を刈り、手入れをしない草原は雑木林と化し、森林に還り失われていく。ところが地元住民であっても、そのことを知らない人は少なくないそうだ。阿蘇といえば広大な草原を焼き払う野焼きのイメージが強いが、野焼きが何のために行われているか、正確な知識が伝わっていないと市原さんは危惧する。「一昔前まで野草は建材としても活用されていたし、農耕牛の餌としても重要な役割を担っていました」。草原は衣食住に欠かせない自然の恵みであり、草原を守り活用することは、生活維持のための当たり前の営みだったのだ。「ところが、ここ数十年で私たちの生活様式は大きく変わり、農業も草原を必要としないスタイルになった。草原を活用する人がぐっと減り、保全ばかりが話題に上るようになったのです」。市原さんが組合長を務める町古閑牧野でも、牧野組合員は50年の間に98戸から30戸に激減し、畜産農家はわずか10戸に。今後も減少は進み、後継者不足はより深刻化すると予想されている。

今が後継者育成の分水嶺次世代に受け継ぐためには

「放牧は牛がお腹いっぱい食べ、のびのび暮らせる。天然の芝刈り機があるようなもので、人や重機が立ち入れないエリアまで牛が入って草を食み、草原を維持してくれるという利点がある反面、牧草地の管理や見廻りといった手間がかかります」。畜産家の両親の背中を見て育ち、大学時代は留学して専門的に畜産を学んだ市原さんでさえ、牧野組合長を引き継ぐ際には「ポケットの中に小石が入っているような重荷を感じた」という。「昔は刈払機もなく、草原の手入れは重労働でした。今は設備や機械が整っていますが、大変な仕事には変わりない。若い人が離れていくのも理解できます」と苦笑するが、明るいニュースもあるそうだ。「今年の輪地切り（野焼きのための防火帯づくり）には、組合員の息子世代が出てきてくれて、嬉しかったなぁ。そういった人たちには、最初から作業負荷をかけすぎず、ボランティアさんと交流を持ったり、牧野の魅力を伝えたりしながら、少しずつ後継者として育っていってほしいと思います。ただ、彼らの次の世代は不透明です。30年後、50年後、誰が責任を持って野焼きをするのか。今が分水嶺だと思って、担い手の育成を確実に行わなくては」。市原さんの瞳に静かな炎が灯る。

ボランティアが教えてくれた新しく懐かしい阿蘇の魅力

近年では人手不足から野焼きを行えない牧野が増え、地域には諦めのムードが漂い始めていた。そんなとき現れた希望の光が、草原保全を目的として設立された公益財団法人阿蘇グリーンストックの野焼き支援ボランティアだ。「全国から野焼きのために多くの方々が訪れてくれるようになりました。彼らは作業をすると同時に、阿蘇で過ごす時間を楽しんでくれます。景観や希少な高山植物、動物、食の豊かさ。彼らに教えられ、見落としていた草原の魅力を改めて認識することができたのです」。

心の重荷もいつしか軽くなり、前向きに草原と向き合えるようになった市原さんは「守らなければ」から「守りたい」への意識の転換がもっとも重要だと感じるように。「素晴らしい財産がすぐ隣にある。けれど、放っておけば失われてしまう。そう実感できてはじめて、能動的な保全活動が可能になるのではないでしょうか」。

阿蘇から博士に！？小さな夢が世界へ

これまで市原さんは、さまざまな角度から草原の魅力を伝える活動を行ってきた。そのひとつが、牧野のガイド事業だ。「ボランティアの皆さんが素晴らしいと喜んでくれる阿蘇の草原を、地域内外のたくさんの方に見てほしい。けれど、見てもらうためには誰かが付き添わなければならないでしょう。防疫対策も必要ですし、動植物の紹介ができるよう知識も身につけなければ。そこで、牧野組合員や地元の方を中心に40名のガイドを育成しました」。地域にとってはガイドがビジネスになり、そこで得た利益を牧野にも還元できる仕組みを考えた。「コロナ禍だからこそ、草原を訪れて癒やされたいという要望は多いですし、他の牧野でも同様の取り組みを行いたいと声がかかっている。今後も、大切に育てていきたい事業です」。

もうひとつ、市原さんが楽しみにしているのが、子どもたちとの交流だ。見学旅行や体験ツアーのオファーを積極的に受け、牧野を案内。大自然で遊ぶ楽しさを伝えている。「草原に迷路を作って遊ぶんです。草原の植物を題材にビンゴゲームをすると盛り上がりますよ。牧野で学ぶことが苦痛ではなく、楽しみになれば良いなと思います」。草原を気に入って「僕、昆虫博士になる！」と声を上げる子どもの声は、何よりの原動力だそう。「大人になって都会に出たら、いつか大切な人を草原に連れてきてほしい」。そんな未来を、市原さんは夢見ている。

宝の山に目を向ける宝の山を守っていく

会長として活動する「阿蘇草原再生シール生産者の会(草原の草を活用して野菜を育てる生産者の会)」では、収穫体験も開催した。「茅で火を焚いて、とうきびを炙り焼きにして食べました。子どもたちも大喜びで、1人で3本食べた子もいたなぁ。参加者が楽しむ様子を見て、仲間たちも喜んでいました。運営の苦労も、嬉しい記憶が支えてくれるものです」。草原には、地元住民も気づいていない魅力がある。牧野組合員や、地元農家の人々にこそ、価値を知ってほしいと市原さんは繰り返し語る。「ここには自分たちの大切な糧があると本当の意味で気づいてもらえたら、草原を守る動機になります。まずは、草原に親しむ機会を設けたい」。

阿蘇の草原は世界の宝。その宝を守るためには地域住民の意識改革だけでは足りないとも感じている。「中山間で草原を守るために、行政には対価を求めたい。欧米では、自然保護や管理に政府からの補助があります。阿蘇でも環境省が植生調査や防火帯づくりを行っていますが、農畜産業への支援も活発に行なってほしいと思っているんです。阿蘇で野焼きをするからこそ、水資源が保たれ、九州全体に豊かな水が供給されるのです」。

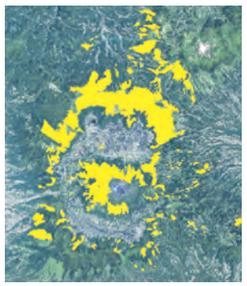
草原を守るためのプロ集団を作りたいと語る市原さん。「次世代につなげていくのがいかに難しいか。単に〝草原を残そう〟と叫ぶだけでは足りません。具体的には ①良さに気づく ②生業になる ③恩恵を受ける ④喜んでもらえている 実感を持つ のステップが必要じゃないかな」。一見すると回り道にも思えるが、千里の道も一歩から。草原とともに暮らす楽しみを共有しながら、オール阿蘇で草原を守っていきたい。その願いに賛同する仲間は、着実にその輪を広げている。

（2021年11月）

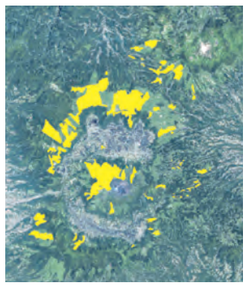
column

阿蘇草原の危機

2016年の熊本県の調査において、「10年以上野焼きなどの維持管理が継続可能」と答えた牧野のみが、30年後も草原の維持が可能と仮定した場合、右図のように、草原面積が約6割減少するという予測が考えられます。現状のままでは、阿蘇の草原は減少の一途を辿ることが自明であり、まずは、減少傾向を食い止めることが求められています。



熊本県の調査に基づく草原面積（2016年）
草原面積



30年後の草原面積の予測（2016年の調査で「10年以上野焼きなどの維持管理が継続可能」と答えた牧野）

阿蘇草原の恵み

1 生物多様性
生き物の棲みかを守る

阿蘇の冷涼な気候と草原は、さまざまな生き物が生育・生息できる環境を育んでいます。阿蘇の草原に生育する植物は約600種と言われています。その中には、九州が大陸と陸続きであったことを物語るヒゴタイ、ハナシノブなど、阿蘇地域や国内の限られた地域にしか生育していない希少な植物もあります。

さらに、草原の植物は多様な昆虫や野鳥が生息できる環境を育んでいます。特に阿蘇は昆虫類の宝庫であり、熊本県産のチョウ類約117種のうち109種が阿蘇に生息しており、「阿蘇はチョウの楽園」とも言われています。

人々は、多くの動植物が生育する草原を「花野」と呼んできました。昔は、草原の花を摘んで墓前に沿える「盆花採り」の光景が当たり前に見られており、草原は人々の生活文化にとって身近な存在でした。この「盆花を見続けられるような風景」が、阿蘇の草原の本来の姿と言えます。

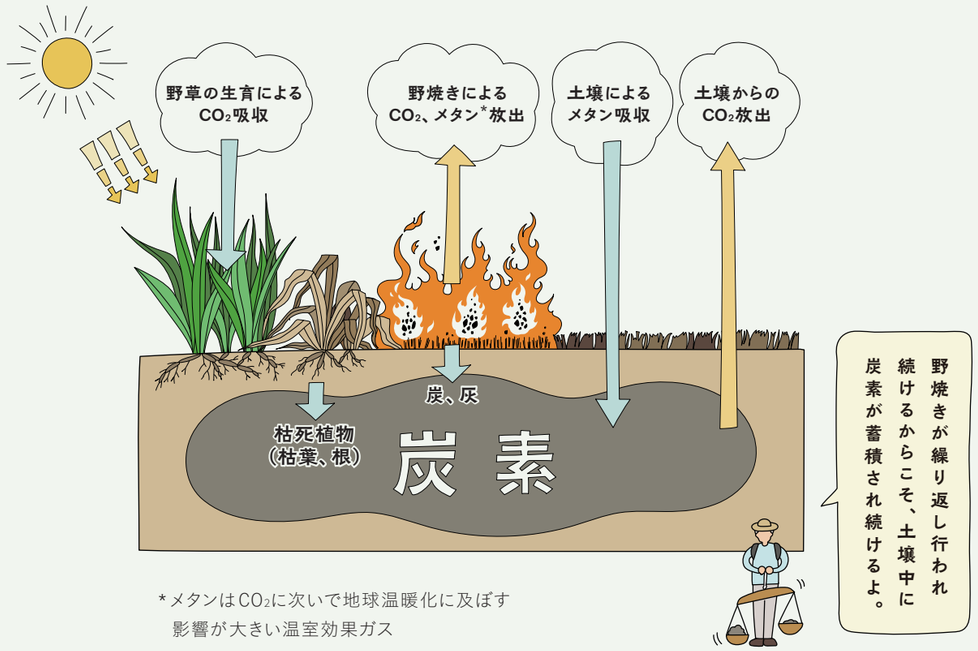
1 生物多様性
2 炭素固定
3 水源涵養
4 減災

2 炭素固定
炭素を地中に溜める

最近の研究によると、阿蘇草原の土壌には、世界に類を見ない極めて膨大な炭素が蓄積されていることが分かってきました。この炭素は、野草の根などの分解物や、野焼き後に残る炭（主にイネ科植物の地上部が燃えた微粒炭）に由来していて、長期にわたって蓄積され続けてきました。

野焼きを行っている草原の1年間のCO_2吸収量は6.9t/CO_2/haと言われていますが、これは阿蘇郡市の全世帯が1年間に排出するCO_2量の1.7倍に相当する炭素を草原が固定していることになります。野焼きによって排出される温室効果ガス（二酸化炭素やメタンなど）と比較しても、CO_2を吸収する効果の方が大きいことが分かってきました。

野焼きによる草原の維持は、地球規模の課題である温暖化防止に貢献している可能性が高いことが明らかになってきています。



*メタンはCO_2に次いで地球温暖化に及ぼす影響が大きい温室効果ガス

阿蘇草原の恵み

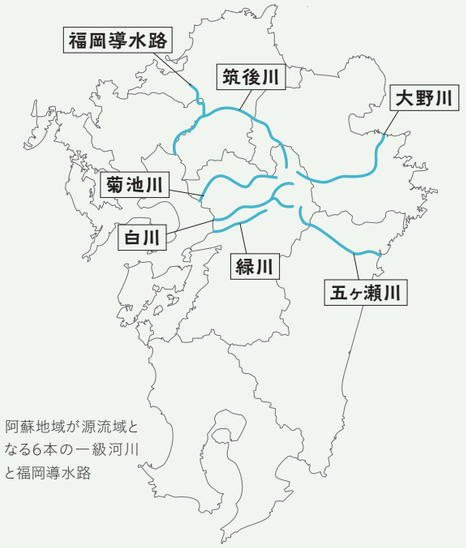
1 生物多様性
2 炭素固定
3 水源涵養
4 減災

3 水源涵養
九州の水源を育む

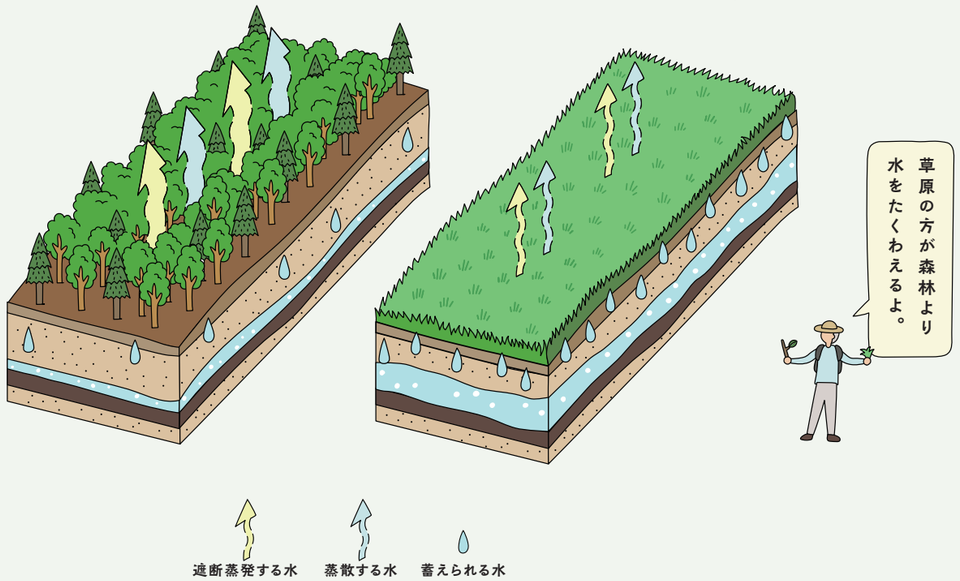
阿蘇地域は、白川や筑後川などの6本の一級河川の源流域となっています。この6河川の流域と、福岡導水路を通じて筑後川から水が供給される福岡都市圏も加えると、流域人口約500万人の水を支えており、「九州の水がめ」と呼ばれています。

草原や森林は、雨水を土の中で貯え、ゆっくりと河川に送り出すことで、大雨の時でも一度に水を放出することなく、また、渇水時期でもゆっくりと水を放出し続けることができますが、この機能のことを水源涵養機能といいます。

阿蘇地域における最新の研究によって、年間の蒸散量（根から吸い上げた水を、大気中へ水蒸気として放出する現象）が、スギ・ヒノキ（約250mm）に比べて、ススキ（約130mm）・ササ（約200mm）などの草原の植物の方が小さいことが判明しました。また、遮断蒸発（枝葉にぶつかった雨水がそのまま蒸発する）量も、草原の方が森林よりも小さいとされています。つまり、阿蘇草原は優れた水源涵養機能を有していることが示唆されたのです。



阿蘇地域が源流域となる6本の一級河川と福岡導水路

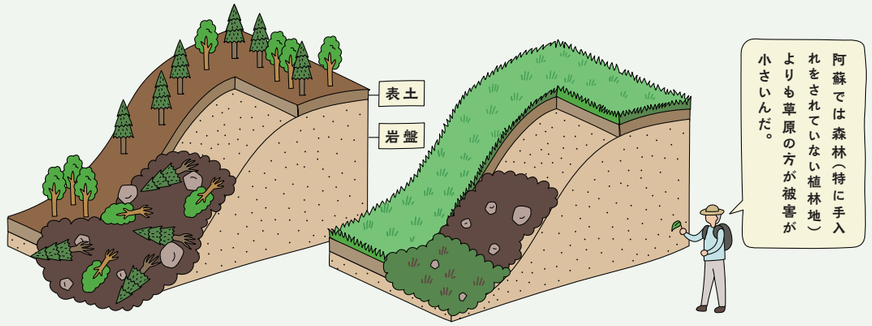


4 減災
土砂災害の被害を緩和する

阿蘇地域の大部分は、火山灰が堆積した土壌であり、特にカルデラ内壁は、大雨や大地震により急斜面の表土が崩れ、土砂災害が発生しやすい地域になっています。これを阿蘇の人々は、ヤマシオ（山沙）、ヤマツナミ（山津波）と呼んで恐れてきました。

阿蘇地域においては、火山灰土壌の下に固い火山性の岩盤があるため、木の根の張りは浅くなり、森林が崩壊を防げない場所も少なくありません。また、（特に手入れが行き届いていない）植林地が崩れた場合は、土砂と樹木が併せて崩壊し被害が甚大化する危険性が高まりますが、草原の場合は崩壊土量が少なく、被害は小さく済むことが、地元の経験則で知られています（ただし、最近の研究では、山裾の植林地は、土砂のせき止めに貢献し、集落への被害を軽減する可能性があることも示唆されています）。

阿蘇地域の地形や地質の特性上、草原と森林が構成する土地利用は、災害時の被害緩和にもつながると考えられます。



column

阿蘇草原と観光

阿蘇草原の美しい姿は、多くの観光客を惹きつけ、観光産業に恩恵を与えてきました。草原の観光といえば、これまではドライブや景勝地を「見る」観光でしたが、近年は、牧野組合の許可のもと、ガイド付きで牧野に入り、散策や自転車などで草原を楽しむ体験型の観光も増えてきています。また、体験の料金に牧野保全料を含めるなど、観光利用を草原の維持管理につなげる取り組みも行われています。

ASO田園空間博物館（道の駅阿蘇）が提供する牧野ライドでは、普段は立ち入れない草原をマウンテンバイクで走ることができます。

阿蘇草原再生のこれから

草原を維持する＝人と自然の関係を再生する

今から約1万年前の縄文時代。阿蘇ではすでに野焼きによって草原が利用・維持されていたと言われている。牛馬の飼料として、質の良い建材として、草原の野草は欠かせない糧であり、暮らしの一部でもあった。「古くから人々は、無意識のうちに賢く草原を活用し、共生していたのでしょう。草原を守るためには、人と草原の関係を見つめ直し、再構築する必要があります。ヒントは、草原の恵みが日々の生活に直接的な豊かさをもたらした時代です」と阿蘇草原再生協議[1]会の高橋佳孝会長は語る。

集まることに意義がある 持続可能な地域社会へ

島根県に拠点を置き、草原の研究を続けてきた高橋さんだが、縁あって2005年に設立された同会の会長に就任した。「協議会は、失われつつある草原の危機をどのように乗り越えるか話し合う場です。当初は100程度の構成員数でしたが、現在は団体・個人を合わせて260ほどの大所帯。草原再生に向けた活動を支援する阿蘇草原再生募金の運用を中心に、さまざまな活動を行っています。また協議会は、緩やかな親戚づきあいを増やすような、新しいコミュニティづくりの役割も持ちます。牧野組合さん同士に交流が生まれ、横のつながりができることも、ともに草原の未来を創っていく力になります」。草原再生の主役は牧野組合であると強調する高橋さん。「まずは牧野組合の方々の声を聞くことを大切にしています。放牧農家の減少、後継者不足など課題は多いですが、立ち止まっている暇はありません」。

草原の恵みを受け取る すべての人に伝えたい

「九州の水がめ」として知られる阿蘇の草原は、炭素固定効果も高く、温暖化の防止にも貢献している。「そういった目に見えない恩恵と、雄大な景色、豊かな食といった観光資源。草原の恵みを享受しているのは、近隣住民に限りません。ところが、その恩恵の源である草原保全の負担は地元に偏っていますよね」と警鐘を鳴らす高橋さん。

草原を守るには自助では難しく、共助にも限界がある。公助によって公共利益を守ることもまた、必要な段階だといえるだろう。「何もしなければ、草原は森林と化します。草原に関わるすべての人が当事者意識を持てるよう、言語化を急ぎ、啓蒙活動にも力を入れていきます。まずは草原にふれ、親しむ機会を増やすことからはじめたい」。草原は誰のもの？　繰り返される命題は、私たち一人ひとりの在り方を問うている。

（2021年11月）

1 阿蘇草原再生協議会
阿蘇の野草地の維持管理や草原環境の保全に向けて、地元牧野組合やNPO、個人、行政など多種多様な主体で構成された協議会。

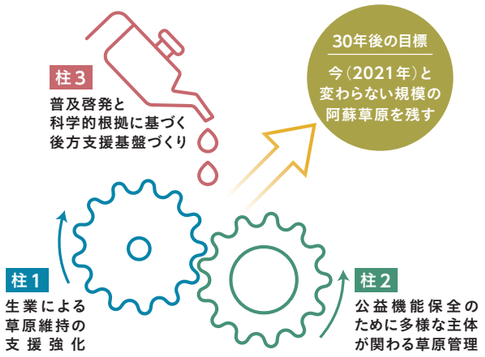
阿蘇草原再生協議会の会長として会議のまとめ役を務める。

column

草原再生へ向けた「3つの柱」

阿蘇草原再生協議会は、2021年11月に「阿蘇草原再生全体構想〈第3期〉」を策定しました。

30年後の目標に、現状と変わらない規模の草原を残すことを掲げ、阿蘇草原の減少傾向を改善させるため、右図に示す3つの基本方針のほか、12の重点取組が整理されました。



インタビュー02
草原再生協議会長

高橋 佳孝
たかはし・よしたか

中国地方や熊本県阿蘇地方を中心に、草地の保全管理の問題に関わる。草原生態系だけでなく農畜産業や文化景観の視点から研究調査を行う。

草原管理を引き継ぐ

インタビュー03 若手牧野組合長

安片 英人　やすかた・えいと

畜産農家として、高森町にある小倉原牧野組合長を務める。自らの牧野の管理だけでなく、他牧野の野焼きボランティア支援にも携わり、草原再生に尽力している。

上写真：小倉原牧野の前に立つ安片さん
右写真：草原の希少植物マツモトセンノウ

失われゆく放牧の風景 〝一人牧野〟で奮闘する日々

「若手といっても、50代半ばですよ」と笑う安片英人さん。高森町にある小倉原牧野の組合長として、たった一人で牧野を守り、あか牛と黒牛20頭を育てる畜産農家だ。先祖代々、放牧で牛を育ててきたと語るが、自身の就農は約25年前。熊本市で会社員として働いていたが、同じく畜産を営んでいた父親から「戻ってきてほしい」と打診を受けた。「いつかは来ると思っていましたから。代々続いてきた営みを、自分の代で絶やす訳にはいかないと覚悟を決めました」。

意識が変わったきっかけは ボランティアとの出会い

安片さんが帰郷した当時ですら、牧野組合員は3人に減っていた。「昔は隣近所17軒のうち15軒が牛を飼っていましたが、農業の機械化や高齢化で1軒、また1軒と減ってしまった」。広大な牧野の見回り、牛の安全管理、野焼きに欠かせない春と秋の輪地切りなど、安片さんの役割は膨大だ。

後継者不足と、牧野を守る責務。苦しい日々を送る安片さんに転機が訪れたのは、野焼き支援ボランティアとの出会いだった。「ボランティアの皆さんは、阿蘇の多くの牧野で蓄積したノウハウを持っている。こちらが教えられることも少なくありません。何より、生き生きと楽しそうで！ 私も彼らに学びたいと思い、他牧野のボランティアに出るように」。ボランティアで得た経験を自身の牧野に生かすことで、効率や安全性が向上。草原の維持についても前向きに捉えられるようになったという。

一面に満開の花が咲く 阿蘇の草原を皆で守ろう

草原の希少植物への造詣も深い安片さん。「5年前から、東京農業大学が放牧と希少植物の関係性について調査してくれています。私が阿蘇に戻ってきた頃、このあたりにはマツモトセンノウが一面に赤い花を咲かせていましたが、放牧が少なくなった弊害で咲かなくなってしまった」。貴重な自然資源を観光に生かすなど、草原を守る動機を皆で共有すれば取り組みやすくなるのでは、と展望を語る。

「牧野の管理は畜産農家の仕事だと思われがちですが、農家に限らず、阿蘇の伏流水の恵みを受けている人、草原の風景に癒やされている人、皆が関係者であり草原の守り手だと知ってほしい」。真摯な瞳で語りかける安片さんは、2017年から未利用の草原を放牧地として復活させる取り組みを始めたほか、阿蘇草原再生シール生産者の会に参加し、野草堆肥を使った野菜づくりを行うなど、阿蘇の草原維持に力を注ぎ続けている。

（2021年11月）

column

野草堆肥とは

野草堆肥とは、草原で刈り取ったススキなどの野草でつくった肥料のこと。阿蘇地域では、古くから水田や畑に漉き込んで活用されていました。野草堆肥の活用は、草原再生だけでなく、減農薬や地下水保全などさまざまな環境保全効果を生み出しています。

さらに近年の研究により、野草堆肥は植物病害を抑える「善玉菌」を多く含むことが明らかとなり、その利用が進んでいます。

草原で刈り取った野草を堆肥づくりのために運び出す。

草原再生に貢献する

インタビュー04
野焼き支援ボランティア

岩本 和也
いわもと・かずや

野焼き支援ボランティアの会代表。設立時からのメンバーで20年以上に渡って野焼き支援に関わる。元消防士という経歴をもつ。

草原のためにできることを ボランティア参加の契機

「野焼き支援ボランティアの会」は、草原の減少を食い止めるために2000年に発足し、現在は約1000人が登録している。代表を務める岩本和也さんは設立当初から活動に携わり、その移り変わりを見守ってきた。「最初に阿蘇の草原保全を意識したのは、現役の消防士として働いていた頃のことです。熊日新聞の記事を読んで草原が存続の危機にあることを知り、少しでも自分にできることを…と考えました」。公募時から野焼き支援ボランティアの会の事務局である「阿蘇グリーンストック」に問い合わせたのが参加の発端だったという。

まるで阿蘇が自分の庭になる 他では得られない喜び

「輪地切りや野焼きの作業日の多くは朝8時半集合。牧野組合長さんにご挨拶し、ミーティングを行ってから作業地へ向かいます。現地では地元の方の指示に従って作業し、お昼休憩を挟んで15時過ぎには撤収です。なかなかの重労働ですが、遠くは北九州から毎週来られる方もいらっしゃいますよ」というから驚きだ。参加動機はそれぞれ。草原の景観を愛する人、自然の中で体を動かすことに喜びを感じる人、人の役に立ちたいと願う人…。岩本さん自身は「最初は使命感にも似た想いから。今は、阿蘇への愛着も大きいです」と語る。通常は立入禁止の牧野で作業を行うため「観光では見ることのない阿蘇の一面を知ることができます。ボランティアは阿蘇全域に派遣されますから、どんどん詳しくなっていきます。おこがましいかもしれませんが、自分の庭が広がっていくような喜びを感じますね」とやりがいを語る。

野焼き支援ボランティアの集合写真。

持続可能なボランティアを目指し 今、変革のとき。

20年以上にわたって野焼き支援に関わり、多くの課題にも直面してきた岩本さん。なかでも2012年に起こったボランティア1名の死亡事故は、会の在り方を大きく変えた。「安全性を高めるため、活動内容、装備、組織の大幅な見直しを図りました。そして今、野焼き支援ボランティアは再び転機を迎えています」。

継続的な活動資金の確保、ボランティアリーダーの高齢化、コロナ禍におけるメンバー相互の交流不足、地元牧野との連携など、改善すべき点は山積している。「連絡アプリを使って情報を迅速に共有する、SNSで草原の魅力を発信して興味関心を高めるなど、今の時代に合った活動の方法を模索しています。地元牧野の皆さんと一緒に、野焼きを持続可能な活動にしていけたら。そのためには、ボランティアも地元参加者の比率を高めていきたいですね」。地元とボランティア、二人三脚の取り組みはこれからも続いていく。

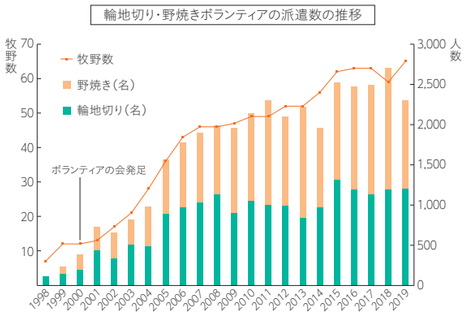
（2021年11月）

野焼き支援ボランティアによる野焼きの様子

column

阿蘇グリーンストックの貢献

野焼き支援ボランティアの会の事務局を務める公益財団法人阿蘇グリーンストックは、行政機関と協力しながら、牧野と一般市民の橋渡し役を担っています。野焼き支援ボランティアの派遣数は右肩上がりであり、2019年度には延べ2,300名を阿蘇全体の1/3近くの牧野に派遣しました。阿蘇の草原再生には必要不可欠な存在となっています。



草原を守り抜く行政の責務

広大な草原を有し、その圧倒的な景観を求めて多くの人が訪れる阿蘇市。希少な自然と文化を守るための取り組みとは。

―阿蘇市にとって、草原とはどのような存在ですか？

阿蘇の人々は古の昔から草原の独特な環境の中で生活を営み、多様な文化も生み出してきました。私たちが世界農業遺産に次いで世界文化遺産の登録に注力しているのも、そういった有形無形の資産を守り、受け継ぐための手段として考えているからです。現在、目の前に広がる美しい草原は、長い時間をかけて人と自然が共存してきた証です。近年は、国の方針で再生可能エネルギー創出が促進され、メガソーラーや風力発電の設置を求められる機会も少なくありません。しかし美しい草原景観は、ひとたび壊してしまったら二度と戻って来ません。新エネルギー政策を否定はしませんが、景観保全とは相容れない部分も大きいですよね。私たち阿蘇の住民は、自然・文化の両面から草原を守る責務を自覚し、持続可能な保全の仕組みを構築していかなければなりません。

「草原」は人類共通の宝、次世代に引き継ぐべき共有財産とも言えます。阿蘇の草原は九州の水がめとして、6つの一級河川の源であり、九州各所に潤いと繁栄をもたらしてきました。また、二酸化炭素を吸収する草原は、全世界で進む脱炭素化の流れにおいても重要な役割を果たしています。その恩恵は広範囲に及んでいるのですから、地域全体で広域の課題として捉え、保全に取り組むべきではないでしょうか。

―草原保全に関して、具体的に取り組まれていることを教えてください。

2007年に「ASO環境共生基金」を設立し、牧野組合の維持管理作業や環境学習、野生動植物の保護活動などを支援しています。2017年には国の重要文化的景観にも選定され、現在は世界文化遺産の国内暫定リスト入りへ向け、文化庁に対しての提案書の提出など要望活動を行っています。今後は草原景観を守るため、さらなる環境の整備が急務です。世界文化遺産登録を通じて、カルデラの内側に人が定住し、鉄道が走るという唯一無二の暮らしの根底にある草原文化を、世界に向けて強く発信していきたいと考えています。

（2022年2月）

インタビュー05 阿蘇市 市長

佐藤 義興 さとう・よしおき

阿蘇郡阿蘇町（現・阿蘇市）生まれ。20代のとき、大分県から牧ノ戸峠を越え、目の前に現れた草原景観の美しさ、雄大さに感動した記憶が今も鮮明に残る。2005年、初代阿蘇市長に就任。

“九州の水がめ”を支える阿蘇草原の価値を知ってほしい

近年、阿蘇草原が有する公益的機能について、さまざまな研究分野から調査・検証がなされています。具体的な数値の裏付けを活用し、草原保全に役立てたいと意気込む南阿蘇村長の想いとは。

―阿蘇の草原が有する水源涵養機能について、大規模な調査が進んでいますね。

私が村長に就任してすぐに環境省へ野焼きの苦労や草原の重要性を訴えました。その後、迅速に動いてくださり、3年がかりで阿蘇の草原に関する調査研究が行われることになったのです。その結果が今年（2022年）3月に発表されましたが、阿蘇では、草原が森林と比較して多くの水を蓄えること、関連性が不透明であった阿蘇カルデラから熊本都市圏に直接つながる地下水の可能性など、大きな収穫がありました。阿蘇草原の価値が改めて立証されたことによって、より多くの企業や個人の皆様へ、草原保全活動への参加を呼びかける契機になればと考えています。

―草原の保全に欠かせない、野焼きについての考えをお聞かせください。

これまで野焼きは牧野の皆さん主導で行ってきましたが、近年、野焼き中に死亡事故が起こったこともあり、組合長の責任が重く、野焼きの実施を諦める牧野が増えてきていました。そこで、南阿蘇村に関しては、村長が「火入れ責任者」を担い、野焼き再開の後押しに力を入れています。今後、安全に野焼きを行うための防火帯整備や人材育成、延焼しやすい草原に接した保安林の問題など、課題は山積みですが、〝水の生まれる郷〟の名にかけて、豊かな水の源である草原を守っていかなくてはなりません。また、水資源の保全に加え、草原や放牧の風景は貴重な観光資源でもあります。IoTを活用した畜産農家の負担軽減、草原ファンを増やすための仕組みなど、新しいアイデアを取り入れながら、村内外の関心を高めて大きなムーブメントを起こしていきたいですね。

（2022年2月）

インタビュー06 南阿蘇村 村長

吉良 清一 きら・せいいち

26歳のとき南阿蘇村（旧白水村）で就農、当時としては珍しい無農薬の「おあしす米」生産に取り組む。2003年、旧白水村議に当選。2017年、4度目の挑戦で南阿蘇村村長に就任。

地域の学びとして草原を知り、ふれあう

草原再生に関わる人は皆、口々に「草原とふれあい、身近に感じてもらう機会を増やしたい」と語る。そのひとつの形が子どもたちへ向けた草原環境学習だ。それぞれの立場から草原での学びに向き合ってきた3人に座談会をしてもらった。

地域の小学校に受け入れられ広がってきた草原環境学習

藤田　子どもたちを対象とした草原環境学習をはじめたころは、教育関係者の間では草原の重要性が理解されづらかったと聞いています。

木部　理解されなかった根底には「なんで草原なの?」という疑問がありました。なぜ草原を守らなくてはいけないのかを先生に簡潔に伝える必要があって、当初苦労したところです。

永田　総合学習として地域のことを学ぶ際、草原環境学習というコンテンツがうまくはまったように思います。

藤田　関係団体との協力も進みました。阿蘇青少年交流の家や、阿蘇火山博物館もみんなで一緒にやっている!という実感がありました。さらに、地元牧野の方を巻き込めたのが良かったですね。子どもたちとふれあって、牧野のおじちゃんたちの嬉しそうな笑顔が印象に残っています。

永田　お互いの良い部分がうまくコラボレーションできたんでしょうね。ジオパーク学[1]では、中岳の噴火や降灰を教材にしたプログラムを実施したことがありました。草原環境学習でも、現場に行ったり何かを作ったりして、そういう活動の中から子どもたち自身が気づき、感じ、考えますよね。

木部　先生の理解や協力も大きいですね。先生の中に草原のことを子どもたちに伝えたいという熱心な方がいらっしゃり、取り組みが進んだ部分も大きいです。

藤田　阿蘇でしか味わえない、特別なプログラムですよね。

地元牧野の方が農具を手に草原の草刈りについて子どもたちに語る。

草原での学びを通じて育まれるもの

藤田　阿蘇草原キッズ・プロジェクトでは、当初目標のひとつに「子どもたちを次世代の担い手として育成する」と掲げていたんです。でもこの目標は成果を測りづらい。卒業してすぐに就農する場合もあれば、数十年後にUターンする場合も考えられる。

木部　成果って難しいですよね。「体験した100人のうち、1人が担い手になったからすばらしい!」というものでもない気がします。

永田　草原へ行ったことで、草原っていいよねって思ってもらえたら、◎でしょう。

藤田　高校生に「小学生のころ、草原に行った?」って聞くと「あぁ、思い出した!」と言う生徒は多いですね。

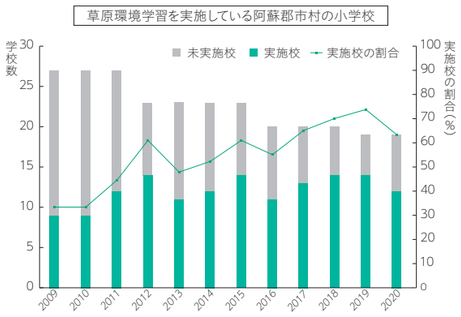
木部　ただ行ったのではなく、誰と一緒に草原へ行ったかというのも大事です。牧野の人と行って「この場所は、先祖代々受け継いで、ずっとこうやって守ってきた場所なんだよ」と聞けば、子どもたちはそういう本気を敏感に感じ取りますから。

写真右から／木部直美(きべ・なおみ)公益財団法人阿蘇グリーンストック：阿蘇に来て以来、草原環境学習に携わってきた。阿蘇草原キッズ・プロジェクトには立ち上げ時から参加。／藤田幸代(ふじた・さちよ)阿蘇くじゅう国立公園管理事務所：アクティブレンジャーとして、阿蘇草原キッズ・プロジェクトを中心に草原環境学習に関わる。／永田紘樹(ながた・こうき)阿蘇ジオパーク推進協議会事務局長：ジオパークの立場から、草原環境学習の推進にも積極的に関わっている。

column

「阿蘇草原キッズ・プロジェクト」の実績

草原環境学習小委員会(協議会の下部組織)では、阿蘇地域の全ての子どもたちが、地域で守り継がれてきた草原について興味・関心をもってもらうことを目的に、2009年から「阿蘇草原キッズ・プロジェクト」を推進しています。小学校への出前授業や教材作成などのさまざまな活動の継続により、徐々に草原環境学習を導入する小学校は増え、2020年には阿蘇郡市内の小学校19校中、12校で実施されています。



藤田　「(この場所を)自分はすごく大切に思ってるんだよ、日本で、世界で一番だよ」という人と一緒に行くと、子どもたちの見方が変わります。

永田　草原での学びを通じて、何か気づきを得てほしいですよね。草原ってどう維持されてるの？とか、これからどう維持していくの？ってずっと答えが出ないじゃないですか。不思議に感じたことを問いとしてずっと持ち続ける気持ちを育てることが大事だと思います。

木部　草原って良いなって一瞬でも思えた子は、自然に対する愛着なり何か大切なものをキャッチしていると思うんですよね。そこで得られる経験は数値で評価できないものだと思っています。

永田　子どもが家に帰ったときに「草原ってこうだったんだよ」って家族に伝えてくれると、草の根的な効果があるだろうと思います。

藤田　阿蘇地域にお住まいの方は、牧野組合には入っていなくても野焼きは手伝うという方も割と多いんですけど、「野焼きに出るのは大変だ」と思っていた方にも、草原について学んだ子どもに「お父さん、おじいちゃんすごいね。草原を守っているんだね」って言ってもらえることで、自信になり、誇らしく思ってもらえると嬉しいですね。

永田　子どもたち本人も、楽しみながら草原について学べたら、阿蘇を離れた後も「変わらない故郷でいてほしい」という想いを持ってくれるのではないかと思います。

草原を身近に感じるきっかけ大人にも

藤田　阿蘇や熊本市内に住んでいても、草原に入った経験がある大人の方は少ないんですよ。そういった人たちにも草原に親しんでほしいと思っています。

木部　草原は、阿蘇の人たちが生活している場からは少し距離があるんですよね。ただ、阿蘇の人たちも、下流域に住む都市部の人たちも、阿蘇の草原で育まれた水を飲んでいたり、実は草原と関わりがありますよね。

永田　「阿蘇いいよね、草原いいよね」って思う人が増えるためには、そのための体験も必要だし、ちゃんとした知識がないといけない。そこで学習の出番なのかなと思っています。子どもも大人も現地に行って「これが良かったよね」っていう人たちが増えていくと、彼ら自身がコミュニティを作っていくんでしょうし。さらには、阿蘇の周辺の都市部の人たちには、旅行のような、ちょっと遊びに来るような感覚で草原を守るお手伝いをしてもらえたらいいですよね。

藤田　いま、阿蘇地域外や親子に対象を広げていて、草原や筑後川などの源流で植物や生き物の観察会の機会を設けています。押し付けにならないよう、「何だか気持ち良かったね」という思い出をつくってもらえるようなプログラムを心がけています。

永田　地元の人にとっては、経済的な価値も大事ですよね。今、阿蘇草原の茅材が再び注目されていて、牧野の人たちもすごく嬉しそうなんですよ。日本の重要文化財である茅ぶき屋根の茅場を阿蘇が担うという新しい生業が生まれています。茅採取は、ユネスコの無形文化遺産に登録されていますし、草原の価値が見直されることで草原が維持されるきっかけになるならば、すばらしいことだと思います。

木部　そこから波及して、野草堆肥の利用が増えたり、昔ながらの草小積みが続いてほしいなと思います。ひとつのきっかけから、阿蘇の草原の価値を改めて発見してもらえたら嬉しいですね。

（2021年12月）

1 ジオパーク
阿蘇地域は「ユネスコ世界ジオパーク」に認定されている。ジオパークとは、地質学的重要性を有するサイトが、保護・教育・持続可能な開発と一体となった概念によって管理されたエリアのこと。

調べ学習として、牧野の中に入って草原の草の様子を観察することも。

阿蘇青少年交流の家で行われる小学生を対象とした草泊まりづくり。

毎年、阿蘇青少年交流の家と草原環境学習小委員会が連携し、阿蘇郡市内の子どもたちを対象とした野焼き体験も行っている。牧野の方や野焼きボランティアの方々が体験をサポートし、草原の維持に欠かせない野焼きについて、子どもたちが学ぶ貴重な機会となっている。

阿蘇草原への関わり方

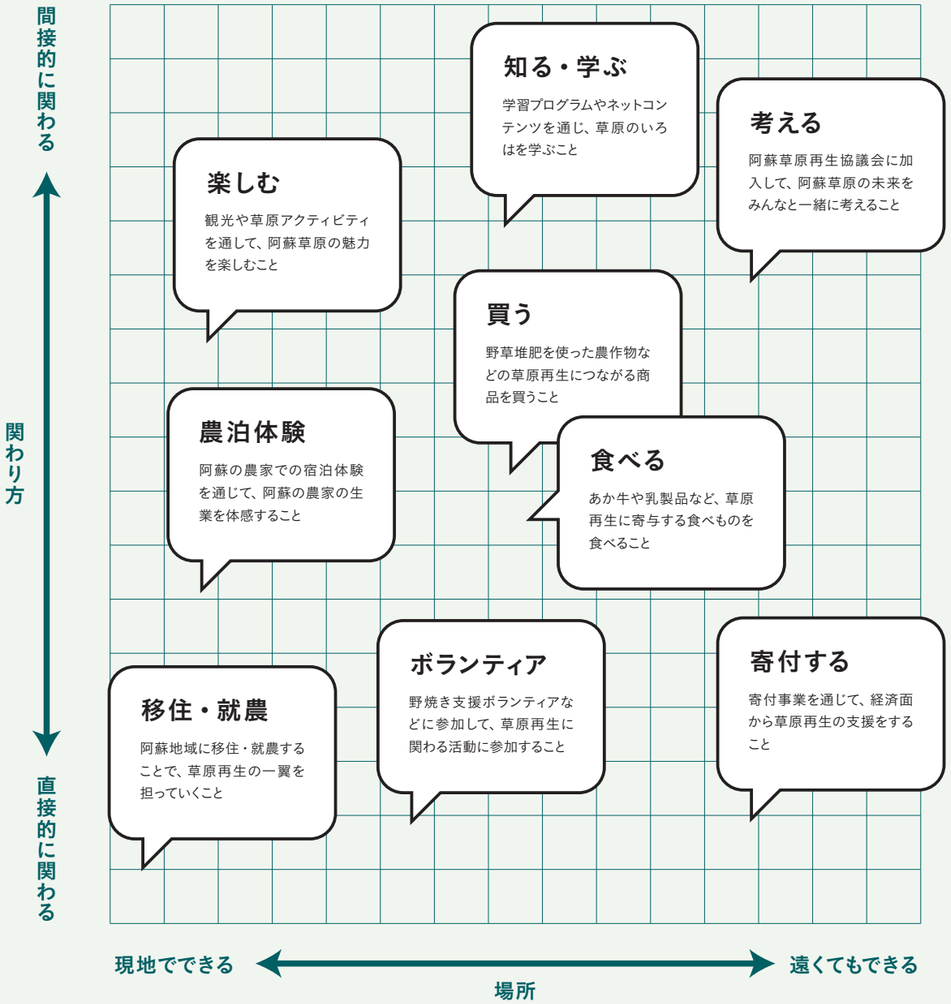
草原再生はさまざまな方法で応援できる

阿蘇の草原再生は、多くの方々の応援を求めています。

「草原再生」と聞くと、〝農作業をしなければならない〟と思うかもしれませんが、実はさまざまな方法で草原再生に関わることができます。

「楽しむ」、「知る・学ぶ」、「食べる」…。一見、草原再生とは関係がなさそうな活動も、まわりまわって、草原再生に貢献することになります。もちろん、ボランティアや寄付など、直接的に草原再生に寄与できる活動もあります。

あなたも、自分に合った方法で、無理なく楽しく阿蘇の草原風景を守る〝担い手・支え手〟になってみませんか？



阿蘇の草原再生に寄与する代表メニュー

阿蘇草原への関わり方の種別に応じて、代表的な活動メニューを整理してみました。

詳しくは各HPを参照するか、阿蘇草原再生協議会事務局へお問い合わせ下さい。

		関わり方								
		食べる	買う	楽しむ	知る・学ぶ	農泊体験	寄付する	ボランティア	移住・就農	考える
現地でできる	**阿蘇あか牛肉料理認定店（46店舗）** PICK UP	●								
	GSコーポレーション（通販）	●	●							
	各市町村の道の駅・産地直売所など	●	●							
	草原再生シールの会	●	●							
	草原アクティビティ									
	草原ライド（マウンテンバイク） PICK UP			●						
	パラグライダー			●						
	乗馬体験			●						
	草原トレッキング			●						
	牧野ガイド			●						
	キャンプ			●						
	阿蘇火山博物館・山上ビジターセンター				●					
	南阿蘇ビジターセンター・野草園				●					
	阿蘇草原保全活動センター				●					
	阿蘇地域農泊推進協議会			●		●				
	野焼き支援ボランティア PICK UP							●		
	移住相談：各市町村窓口								●	
遠くてもできる	あか牛オーナー制度 PICK UP	●					●			
	寄付事業									
	阿蘇草原再生募金						●			
	ふるさと納税						●			
	その他寄付事業						●			
	インターネットコンテンツ（各機関HP参照）				●					
	阿蘇草原再生協議会への参加									●

道の駅阿蘇

道の駅あそ望の郷くぎの

阿蘇草原保全活動センター

草原再生への関わり方
PICK UP

1 あか牛を食べて草原再生を応援
阿蘇あか牛肉料理認定店

阿蘇の草原にとって、草を食べ続けてくれるあか牛の放牧は欠かすことができません。100gのあか牛を食べるとおよそ4畳半（7.5㎡）の草原維持につながると言われています。「阿蘇あか牛肉料理認定店」であか牛を食べることは、阿蘇の草原保全につながると言えます。

あか牛丼

阿蘇あか牛肉料理認定店のマーク
認定店は阿蘇地域に46店舗
（2022年4月現在）

詳しくはこちら
阿蘇地域世界農業遺産推進協会
https://www.giahs-aso.jp/

阿蘇あか牛肉料理認定店の基準

1. 阿蘇地域で、誕生から肥育まで全期間飼養されたあか牛であること。
2. 飼料として、阿蘇産の牧乾草や稲ワラなどが主に給与されていること、または阿蘇の牧野で育った経歴があること。

2 阿蘇草原の魅力を満喫しよう
草原アクティビティ

トレッキング、マウンテンバイク、乗馬体験…。阿蘇草原の魅力を存分に味わうさまざまなアクティビティがあります。牧野ガイドなどでは、料金に「牧野保全料」が含まれ、楽しみながら草原の維持管理に貢献できる仕組みとなっています。

ASO田園空間博物館が提供する草原ライド

主な草原アクティビティの紹介

エルパティオ牧場
月夜のホーストレッキング、乗馬体験など

SMO南小国
ドローン操縦

ブルーグラス
乗馬体験

サイクリングツーリズムコギダスCLAMP
サイクリング

ASO田園空間博物館
牧野ガイド、草原ライド（MTB）

あそたんガイドツアーズ
草原ライド、トレッキング

REASO
ナイトトレッキング

阿蘇ネイチャーランド
気球、パラグライダー、ヨガなど

詳しくは各事業者等へ
お問い合わせください。

3 草原の維持活動に直接参加する
野焼き支援ボランティア

野焼き支援ボランティアは、阿蘇草原再生を担う中核的な存在です。定期的に初心者研修会を開催しています。

輪地切りの様子

野焼きの様子

輪地焼きの様子

初心者研修会の様子

野焼き支援ボランティアの活動

人手不足や高齢化によって、野焼きの継続が困難な牧野にて火消しや輪地切り（防火帯づくり）活動の支援をします。

詳しくはこちら
公益財団法人 阿蘇グリーンストック
http://www.asogreenstock.com/

4 草原再生を寄付で支援
阿蘇草原再生募金

阿蘇草原再生協議会では、幅広い人々の力で阿蘇の草原を守っていく仕組みのひとつとして、阿蘇草原再生募金に取り組んでいます。集まった募金は、あか牛導入費用など、草原再生に関するさまざまな活動を支援するために活用されます。

募金の主な使い方

1. 草原維持管理の継続
2. 繁殖あか牛の放牧推進
3. 草原の生物多様性保全
4. 草原環境学習の推進／後継者育成

詳しくはこちら
阿蘇草原再生協議会
募金事務局からのお知らせ
https://www.aso-sougen.com/kyougikai/restoration/bokin.html

発行 2022年5月
阿蘇草原再生協議会事務局（環境省九州地方環境事務所 阿蘇くじゅう国立公園管理事務所）
〒869-2225 熊本県阿蘇市黒川1180 TEL：0967-34-0254 FAX：0967-34-2082
写真提供：環境省、公益財団法人阿蘇グリーンストック、国立阿蘇青少年交流の家、ASO田園空間博物館、ひとちいき計画ネットワーク、市原啓吉氏、井上真希氏、長野良市氏